

## 移住漁民の講集團の形成と

### 母漁村の文化的背景の比較考察

— 釧路市の日枝講・善友講の事例 —

鷹田 和喜三

#### 一、研究の視点と課題

私は北海道の講集團の形成過程の研究は農民の移動が激しく、記録資料の乏しい開拓村落の形成・展開過程をさぐる一つの手がかりとなり、団体入植村落の場合は府県の母村との関連交渉を考察する有効な糸口となり、また母村と移住村の講集團の比較考察は文化変容のテーマになりうると考え、農村の事例調査を継続してきた。釧路に転動したことを機縁に漁村の調査を企図し、同様の視点から新潟県と富山県出身漁民の形成した講集團の事例を報告する（報告で

は前者を中心とする）。

「釧路漁業発達史」の著者、布施正氏は府県の出漁・出稼によって形成された釧路漁業は母漁村との相互関連によって形成過程が把握されると強調される。報告では母漁村と移住地の比較研究の視点から、講集團の形成と母漁村の文化的背景の関連、漁民の定着過程と漁業移住の背景を明らかにし、北海道漁村と府県母漁村の関連交渉を考察することを課題とする。

#### 二、調査地の概況

日枝講が形成され、現在も講員の多数が在任する釧路市旭町は旧・釧路川の右岸に位置し、明治中期以降、新潟県出身漁民の出稼・移住が多く、川崎船による沿岸の手操り底曳の中心地であった。とくに北蒲原郡次第浜と藤塚浜出身者が多く、地区内に母漁村から分遷された日枝神社が所在し、お盆には越後盆踊りが催される。川畔は小型漁船の船付場で沿岸には水産関連の施設が多いが、戦後は市街化が進み、近年に土地区画整理事業が行われ、漁業が衰退したため、旭町は漁家集落の面影を失ない、漁民は多く転出、廃業した。

母漁村の次第浜は新潟市から北東二〇キロ、新発田市から西へ八キロ距てた聖籠町の漁村地区で加活川の左岸に位置し、右岸には紫雲寺町藤塚浜が位置する。旧・次第浜村は明治二年（当時の戸数は一六〇戸）、近隣の漁村と合併し亀代村の大字となり、同村は聖籠村と戦後に合併し、昭和五二年に町制を施行した。戦前期の次第浜は約一八〇戸の漁村で沿岸の零細な漁業と出稼が生業の中心で、明治期以降とくに釧路への出漁・移住が多かった。近年、新潟東港

工業地帯の開発とともに転入者が増加し、現在は約四六〇戸で通勤労働者が大多数である。漁業に従事する世帯は約七〇戸だが、専業は五、六戸のみである。若い後継者は他産業に通勤し、高齢者が副業的に沿岸漁業を営む家が近年増加している。漁業出稼者は近年、急減し、鉏路や福島県へ約二〇名程度である。

### 三、講集團の組織と実態

母漁村の神社名に由来する日枝講はオサンノサマ講と通称され、講員は氏子とも呼ばれる。現在三六名で、大多数は次第浜出身の二、三世で、高齢者が多く、漁業関連業者が約半数を占める。講で日枝神社を維持し、一月に親睦総会、八月に神社祭典と盆踊りを行なう。同村出身者は次第浜会に加入し、結束、親睦は強い。

講員の母と妻を中心にして、講という名称はないが、夜籠り行事が毎月一回行われている。昭和二十年代まで母漁村から明治期に継承された庚申講と大宮講（安産・子育てを祈願）も次第浜、藤塚浜出身者の間で行われていた。

### 四、漁民の移住・定着と講集團の形成

鉏路市に在住する次第浜出身者は分家・孫分家を含めると二〇〇戸を超える。移住の先駆者はどのように鉏路に定着したか、鉏路漁業の発達史と関連させて、いくつかの調査事例を報告する。

日枝神社の設立には特別の契機は無かったが、大正末期に旭町に定着した先駆者が出稼者や移住者から募金を行ない、昭和二年に現

在地に同名の神社が分遷・創建され、神社は祭典ばかりでなく、前記の講行事や親睦会の会場にも利用されてきた。

日枝講はその直後に、明治期に移住し生活基盤を確立した約二〇名で結成され、日枝神社を信仰・維持する人々の講集團、同郷出身者の親睦組織として定住者の増加とともに講員は増加した。慰安の乏しい漁場移住地での祭典、親睦行事は連帯感を深め、昭和三十三年に講規約を明文化し、四十年に講旗を作り、東京の日枝神社本社からお礼をもらい、講員に配礼した。

### 五、母漁村の移住の背景と文化的背景

移住のプッシュ要因として大火による生活困窮、沿岸漁業の不振、先駆者の勧誘、鉏路の底曳漁業の発展が考えられる。資料不足のため最近調査した藤塚浜の事例も考察する。そして日枝講の母胎となった母漁村の講集團の実態を中心に文化的背景の特質を探る。

### 六、講集團の比較考察

最後に富山県入善町八幡出身の漁民を中心に形成された善友講と比較考察し、その性格を整理する。相違点は次頁の表のごとくである。

表1 講集團の比較

	日枝講	善友講
1. 講員数	36名	27名
2. 行事	神社祭典、盆踊り 夜ごもり、庚申講	月例講、報恩講、 追善供養
3. 結成年	昭和2年頃	大正7年
4. 形成契機	神社分遷	物故者供養
5. 所在地	旭町、川上町	入舟町
6. 同郷集團	次第浜会 (20名)	八幡会 (15名)
7. 檀家宗派	曹洞宗	浄土真宗
8. 母漁村の 講集團	夜ごもり、庚申講 大宮講、その他	善友講、六日講、 商人講、太子講
9. 母漁村神社	日枝神社	八幡社 (氏神)
10. 釧路移住	明治末期、 底曳漁	大正初期、 マグロ漁